

令和 4年 9月 30日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080110

氏名 長江侑紀 長江侑紀

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ストックホルム (国名 スウェーデン)
2. 研究課題名（和文）：保育の場における移民の子ども：スウェーデンの事例に着目して
3. 派遣期間：令和 3年 9月 25日 ~ 令和 4年 9月 15日 (355日間)
4. 受入機関名・部局名：ストックホルム大学教育学部
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

報告者は、スウェーデンの文化的多様性における教育的課題を就学前段階に注目して検討することを目的に、研究を進めてきた。スウェーデンの幼児教育は、民主的で子ども中心のカリキュラムを持つため国際的にも注目されているが、近年は文化的多様性にまつわる課題に直面している。背景には、2016年以降、それ以前に比べ、移民の背景を持つ子どもが増加していることが挙げられる。しかし、こうした現状を実践現場から報告する研究は多くなく、また、ナショナルレベルの教育指針においても具体的な方針や実践は明記されていない。そこで、報告者は、スウェーデンの幼児教育の教師が、これまで彼らが蓄積してきた専門的知識をどのように活用し、そして補助的な支援を得ながら、文化・言語的多様性に配慮した活動を実践しているのかを検討することは意義があると考えた。研究を進めるにあたっては、受入研究者である Ulf Fredriksson の他、現地の指導教員として Susanne Kreitz-Sandberg から研究に対する継続的なフィードバックと指導を受けた。

研究状況を二つに分けて報告する。一つは、文化的多様性に関する制度・社会構造を含めたスウェーデンの幼児教育の概要を理解するための研究である。もう一つは、実践現場へのフィールド調査に基づいた研究である。研究は、ヨーロッパ、特に近年のスウェーデン国内の学術界で顕著な問題となっている研究倫理の倫理承認申請のプロセスの理解から始まった。倫理承認申請の関係で、現場のフィールド調査に基づいた研究の実施は今年度中には困難であることを指導教員から教授してもらいながら、研究派遣中には、フィールド調査に基づかない文献調査と、今後の研究につながるような、現地の就学前施設を訪問し教師に話を伺うプレ調査を実施した。

申請者は、教育学部の他の研究グループや他の研究者とのネットワークも構築することができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

研究成果として、研究論文の執筆、投稿がある。研究内容の一つ目にあたる、文化的多様性に関する制度・社会構造を含めたスウェーデンの幼児教育の概要の研究である。ストックホルム大学の他の博士課程の学生とともに、「The Swedish Preschools Philosophy on Learning in Nature」に関する論文を執筆した。現在学術誌にて印刷中である。

研究内容の二つ目に関して上記に報告したように、プレ調査として、報告者はスウェーデン滞在中にストックホルム近郊の2つの就学前施設を訪問し、さらに複数の教師たちに話を伺う機会を得ることができた。研究倫理の観点から、これらの訪問や面接に基づいた研究成果を発表することはできないが、この経験は今後の研究のための事前調査として理解することができる。

また、今回の研究渡航中に研究倫理申請のプロセスを学ぶことができた。今後の研究のために大きな一歩を踏むことができたといえる。滞在中に構築した研究者および現場実践者とのネットワークは、今後の研究遂行にかかせない。

他にも、研究渡航中には、学内の研究発表の機会を得ただけではなく、欧州の国際学会にて研究発表を行うことができた。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本プログラムに採用されて得られたことについて、4つの観点から報告したい。

一つ目は、学術論文の執筆が進んだことである。上述したように、一つの論文は国際学術誌への記載が決まっている。まだ論文という形になっていない知識や経験も多く、今後は本研究渡航で得られた情報に基づいて、国内の学術誌への投稿も予定している。

二つ目は、スウェーデンで社会科学の研究を遂行するために必要な研究倫理の倫理承認申請についての制度及び申請プロセスの知識を得られたことである。ここ数年、スウェーデン国内では研究倫理について、特に法制度の整備やそのプロセスについての変化が大きく、その情報は現地の研究者と情報交換をしながらでないと分かりにくい部分がある。また、現在では研究を遂行するためには研究倫理承認申請が不可欠であるといえる。そして、承認されるまでの過程は少なくとも半年、内容によっては1年かかることがわかった。このように、研究の中でも比重の大きい研究倫理審査のプロセスについて、現地の研究者の助言や講座に出席することで勉強することができた。

三つ目は、将来の研究遂行に必要な現地でのネットワークの構築ができたことである。二点目に挙げた研究倫理の審査を通過した後に想定される課題として、フィールド調査を実施したりインタビュー調査をしたりするための教育現場へのアクセスの困難が挙げられる。1年間で出会うことができた現場実践者の方々とのつながりは、将来の研究に重要なだけでなく、この1年間で報告者の知見を広げ、深める、大変貴重なものであった。また、現地の研究者だけではなく、日本の大学関係者や研究者との交流もあり、より広義のネットワークに参加することができた。

四つ目は、受入機関であるストックホルム大学教育学部の研究者と交流することができたことである。報告者の研究と課題を共有する研究者との交流は、本研究渡航を充実したものにしただけでなく、継続した研究遂行を展望するための重要な機会であった。また、報告者と同じような立場にある博士課程の学生との交流は、報告者の学術的な知見を深めただけでなく、スウェーデンの博士課程学生の現状や制度を知ることで、日本での研究者のキャリア形成や働き方を考えさせる機会となった。